

## 「人種」と「人種主義」をめぐる博物館展示の動向： フランスの人類博物館とアメリカ人類学会の展示会 の事例

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): race   racism   museum exhibition   Musée de l' Homme   American Anthropological Association (AAA) 作成者: 亀井, 伸孝 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00009098">https://doi.org/10.15021/00009098</a>

資料 Research Resources

「人種」と「人種主義」をめぐる博物館展示の動向  
—フランスの人類博物館とアメリカ人類学会の展示会の事例—

亀井伸孝\*

Trends of Museum Exhibitions on “Race” and “Racism”:  
Cases of Exhibitions by Musée de l’Homme in France  
and the American Anthropological Association

Nobutaka Kamei

- |                         |                       |
|-------------------------|-----------------------|
| 1 はじめに—本報告の目的と背景        | (4) 世界の他の地域の事例        |
| 1.1 近年における人種主義の再燃       | (5) 自然科学の成果           |
| 1.2 人類学および博物館の役割        | (6) 素朴な疑問と回答          |
| 1.3 フランスとアメリカにおける展示会の試み | (7) フランス社会における現状      |
| 2 【事例1】フランス、人類博物館による展示会 | 2.2 展示会のおもな特徴         |
| 2.1 展示会の概要紹介            | 3 【事例2】アメリカ人類学会による展示会 |
| (1) 分類をめぐる政治性           | 3.1 展示会の概要紹介          |
| (2) 人種主義の構築過程           | (1) 総論的なエントランス        |
| (3) 人種主義がもたらした悲劇        | (2) 歴史的経緯とアメリカ社会の現状   |
|                         | (3) 新しい成果と未来への提言      |

\* 愛知県立大学

**Key Words** : race, racism, museum exhibition, Musée de l’Homme, American Anthropological Association (AAA)

**キーワード** : 人種, 人種主義, 博物館展示, 人類博物館, アメリカ人類学会 (AAA)

3.2 展示会のおもな特徴	5.1 同時代におけるふたつの展示会の意義
4 フランスとアメリカの展示会を比較して	5.2 残された諸課題
4.1 両展示会の共通点	5.3 日本における今後への示唆
4.2 両展示会の相違点	
5 おわりに—同時代における意義と課題、今後への示唆	

## 1 はじめに—本報告の目的と背景

### 1.1 近年における人種主義の再燃

2017年、フランスとアメリカの博物館で、くしくも同じ時期に、人種（英仏ともに race）および人種主義（英 racism / 仏 racisme）をテーマとした、ふたつの展示会が開催されていた<sup>1)</sup>。本報告は、これらの展示内容を具体的に紹介し、今後の日本における取り組みの参考事例として提示することを目的とする。

本報告を執筆する背景として、日本および世界における人種主義の再燃という現象を指摘しておきたい。今日、他者を侮蔑する言説がインターネット上で吹き荒れ、極端な思想に基づいた暴力的なデモが在日外国人の生活圏を脅かしている。公共空間における言説でもその徴候が目立ち、たとえば一部の政治家は人種主義的、排外主義的発言を繰り返し、近隣諸国や諸民族を侮蔑するタイトルの書籍が店頭並び、マスメディアの一部もそれらを諷めるどころか、むしろ迎合する風潮すら散見される。

世界に目を転じると、ヨーロッパでは移民・難民をめぐる議論のなかで排外主義がしばしば吹き荒れ、イギリスのEU離脱などの動きもあいまって、民族主義、ナショナリズム、人種主義が台頭、一部では政権与党にも参画するほどの勢いを見せている。アメリカでも、トランプ政権成立の時代状況のもと、排外主義、人種主義を公然と叫ぶ動きが顕著になりつつある。テロや犯罪を根拠にして特定地域の出身者や宗教に属する人びとを侮蔑し、その侮蔑がまた新しい憎悪を招くと

いうふうには、悪循環すら招いている現状がある。スポーツや芸能の分野で、人種主義に根差した揶揄などの行為が発生し、物議をかもしという事件も、後を絶たない。

特有の政治経済的背景のもと、排外主義的な思想、とりわけ人種主義が再燃することを防ぐことは、今日の私たちにとって重要かつ切迫した世界的課題のひとつである。

## 1.2 人類学および博物館の役割

こうした状況にあって、人類学、博物館および隣接領域の研究者においては、どのような社会への関与が可能であろうか。日本において、人種をめぐる知見の着実な蓄積はかねてより行われているが（竹沢編 2005; 斉藤・竹沢編 2016; 坂野・竹沢編 2016; 川島・竹沢編 2016）、専門性に根差しつつ、社会に対する明快なメッセージを届けていくこともまた重要であろうと考えられる。そのような社会的発信の取り組み事例として、たとえば最近では、新しい研究成果である『人種神話を解体する』シリーズの刊行に関連した連続セミナーが開催されている（京都大学人文科学研究所 2017a; 2017b）。さらに、啓発的書籍や高等学校における世界史教育などを通じて、人種概念の捉え直しを提起する試みなどがある（ヘンリ 2002; 高橋 2005）。

これらに加え、研究成果の社会的発信のひとつの手段として、博物館展示に注目したい。日本では、国立民族学博物館「多みんぞくニホン—在日外国人のくらし」（大阪府吹田市、国立民族学博物館、2004年3月25日～6月15日）を始め、これまでも多文化共生をめぐる企画などの取り組みが行われてきている（国立民族学博物館 2004）。一方で、人種そのものを明確にテーマに掲げた展示企画は、これまでは少なかったものと見られる。

「人種」「レイシズム」を明確にテーマに掲げた近年の取り組みとして、「SAY NO TO RACISM —人種差別にレッドカード」（2014年7月22日～9月20日、大阪府大阪市浪速区、リバティ大阪）や、「レイシズムにさよならを」（2016年12月23日～2017年1月29日、神奈川県川崎市中原区、川崎市平和館）などが挙げられる（リバティおおさか 2014; センゴネット 2017）。こうした取り組みに注目しつつも、より大きな視野で「ヒト」という生物種の全体像を捉え直し、人

類学の新しい知見をもって社会啓発に取り組むような大がかりな展示企画があってよいものと期待される。

### 1.3 フランスとアメリカにおける展示会の試み

排外主義が強まりつつあるという意味で、ある側面では日本と似通った状況にあるとも言えるフランスとアメリカにおいて、人種と人種主義を明快に主題に掲げた博物館展示が行われていることは、注目に値する。これらの展示会において、人類学者たちはどのような素材、知見、視点、方法を用い、同時代に向けてどのようなメッセージを発信しているのであろうか。それらの試みから、私たちが学びうることは何であろうか。

本報告では、フランスとアメリカの両方の展示会をそれぞれの現地で直接見聞した筆者の経験に基づき、展示内容とメッセージの概要を記録するとともに、それらの比較から見えてくるこの分野の動向の特徴を指摘し、今後の日本における取り組みのためのいくつかの示唆を述べる。

筆者は、フランスとアメリカで実際に開催されている博物館の展示会を視察し、記録を行った。また、関連する書籍やウェブ上の文献を収集した。両展示会の概要は、表 1、表 2 の通りである。

表 1 【事例 1】 フランス、人類博物館による展示会の概要

展示会名称	「私たちと他者—偏見から人種主義まで」 ("Nous et les autres: des préjugés au racisme")
開催地	フランス・パリ (17 place du Trocadéro, 16e arrondissement, Paris, France)
開催施設	人類博物館 (Musée de l'Homme)
開催期間	2017 年 3 月 31 日～2018 年 1 月 8 日
展示会における使用言語	フランス語, 英語
展示会の特製パンフレット／書籍	あり (Heyer et Reynaud-Paligot eds. 2017)
現地調査日	2017 年 10 月 21 日, 同 12 月 27 日

(Musée de l'Homme 2017; UNESCO 2017 に基づき筆者作成, 日本語訳は筆者による。)

表2 【事例2】 アメリカ人類学会による展示会の概要

展示会名称	「人種—私たちはそんなに違うのだろうか？」 ("Race: Are We So Different?")
開催地	アメリカ・シカゴ (1601 North Clark Street, Chicago, Illinois, USA) <sup>(※1)</sup>
開催施設	シカゴ歴史博物館 (Chicago History Museum) <sup>(※1)</sup>
開催期間	2017年11月11日～2018年7月15日 <sup>(※2)</sup>
展示会における使用言語	英語
展示会の特製パンフレット／書籍	あり (Goodman, Moses and Jones 2012)
現地調査日	2017年11月19日

(American Anthropological Association n.d., 2016; Science Museum of Minnesota n.d.; Chicago History Museum 2017 にもつぎ筆者作成, 日本語訳は筆者による。)

(※1) この企画は全米の諸都市で巡回展示されているため, ここでは調査対象となったシカゴにおける展示会の情報を掲載した。

(※2) シカゴ歴史博物館における展示会期間を掲載。今後の展示予定については, ウェブサイトなどで公開される見込みである (American Anthropological Association 2016; Science Museum of Minnesota n.d.)。

## 2 【事例1】 フランス, 人類博物館による展示会

### 2.1 展示会の概要紹介

フランス, パリにおける展示会「私たちと他者—偏見から人種主義まで」は, 国際連合教育科学文化機関 (ユネスコ) の後援のもと, 人類博物館によって実施された (Musée de l'Homme 2017; UNESCO 2017) (写真1)。ここでは, おもな展示内容をピックアップして, 概要を紹介する。以下で記す(1)～(7)の展示内容の分類は筆者の判断によるものであり, 小見出しに挙げた語句も筆者の文責によるものである。

#### (1) 分類をめぐる政治性

エントランスで, 参観者はまず円形の映像コーナーに入る。ここでは, 電車や街の中で見かける多くの人びとの姿が映され, それらが, たとえば「男性／女性」「白人／黒人／アジア系」「キリスト教徒／ムスリム／ユダヤ教徒」などと事後的にラベルが貼られていく様子が示される。世界には中立な分類など存在せず, 歴史的な文脈のなかで私たちは人びとを分類して認識していると解説し, 分類という行為それ自体にそなわった政治性が対象化される。



写真1 フランス、人類博物館および展示会エントランス  
(上：2017年10月19日，下：同10月21日，人類博物館にて筆者撮影)

## (2) 人種主義の構築過程

ついで、年表、書籍、ポスターなどの展示とともに、人種主義の歴史をひもとくコーナーがある。コロンブスのアメリカ大陸到達、奴隷貿易と植民地化のプロセスの中で、政治的に人種概念とその階層的な序列の認識が構築された経緯を示す。また、リンネ、ビュフォン、キュヴィエ、ゴビノー、ブローカといった博物学、人類学の系譜に属する研究者たちの古典的著作が並び、学問の成立・発展とともに、政治的な人種概念が科学的言説として仕立て上げられていった過程が示される（写真2上）。さらに、フランスで行われていた植民地博覧会のポスターや商品のデザインにおいて、いかに人種が表象されてきたかの例示がある（写真2下）。

## (3) 人種主義がもたらした悲劇

次のコーナーでは、三つの小部屋が設けられ、各室内では数分ほどのドキュメンタリー映像が繰り返し上映される。ナレーションはフランス語であったが、フランス語字幕版、英語字幕版が交互に自動再生される形であった。

三つの映像は、アメリカにおける人種隔離と公民権運動の歴史、ナチスドイツにおける人種主義とユダヤ人などへの迫害の歴史、ルワンダにおける民族分断と虐殺の歴史を扱っている。いずれも、当該の事件のみを扱うのではなく、たとえば第一次世界大戦後のドイツ経済の混乱や、ベルギーによるルワンダの植民地分断統治などの前史にも触れている。また、ナチスの人道に対する罪が広く知られた後に世界人権宣言が採択されたが、同じ年に南アフリカではアパルトヘイト政策が始まったこと、ルワンダ虐殺の翌年には、スレブレニツァの虐殺が起きていることを指摘し、人種主義をめぐる犯罪が後を絶たないというメッセージを発している。さらに、ナチスドイツ占領下のフランスにおけるユダヤ人迫害の事実にも触れている。

## (4) 世界の他の地域の事例

壁面の掲示として、アイヌとピグミー系の人びとの話題が取り上げられていた。それぞれ、写真と短い解説で構成され、日本における支配と強制的同化の歴史、あるいは、中部アフリカにおいて人間として対等に扱われてこなかった歴史



写真 2 人種主義の構築過程をめぐる展示  
上：博物学、人類学の系譜に属する著名研究者たちの著作  
下：植民地博覧会のポスター  
(2017年12月27日、人類博物館にて筆者撮影)

を簡潔に紹介している。

#### (5) 自然科学の成果

三つの映像モニターを用いて、遺伝学などの自然科学の見地に基づいた啓発的なアニメ映像を見たり、インタラクティブ映像でワークをしたりすることができるコーナーである。アニメ映像では、ホモ・サピエンスがアフリカで生まれ、短期間のうちに拡散した種であること、祖先をたどっていけば必ず共通の集団に行き着くこと、別べつの人種であるかのように信じられている遠方の集団どうしであっても、その遺伝的な共通性が高いこと、すべての個人は遺伝的にユニークな存在であり、集団内における遺伝的多様性があることなどが、分かりやすい映像表現とともに解説されている（写真3上）。

また、インタラクティブ映像のワークとしては、たとえば、パネルに触れて「肌の色」「瞳の色」「髪の色」「背の高さ」「性別」などの特徴を選ぶと、それがどのような遺伝子に由来すると考えられているかを表示し、それらの特徴が相互に独立して遺伝すること（つまりいくつかの特徴がセットとなって生物学的な「人種」を構成しているのではないということ）を見ることができたり、遺伝的にすべてが決定するわけではないという解説を読めたりする（写真3下）。また、「体力」や「知能」を選ぶと、そのような特徴に関わる遺伝的な根拠は示せないという意味で「？」が表示される。

#### (6) 素朴な疑問と回答

自然科学コーナーに入る手前に、人種をめぐる素朴な疑問の掲示がある（写真4上）。「科学が人種主義について何か言えることはありますか？」「犬種はあっても、人種はないのですか？」「もし人種が存在しないというのなら、なぜ人びとの肌の色は違うのですか？」などの問いかけが壁面に掲示されている。そして、自然科学コーナーの出口付近で、それらへの簡潔な回答を記したパンフレットを無料でもらうことができる（写真4下）。

#### (7) フランス社会における現状

最後のコーナーでは、フランス社会の現状が紹介される。ドキュメンタリー映

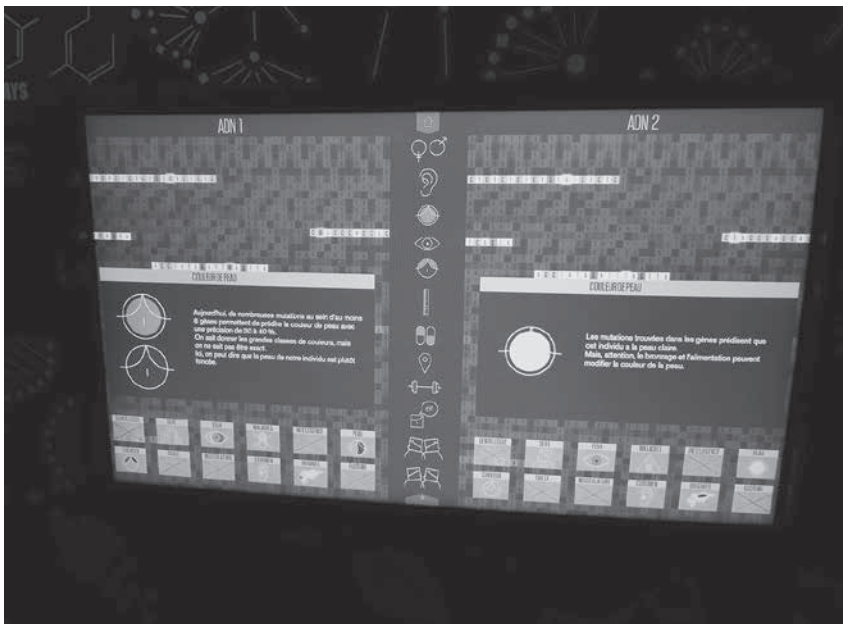
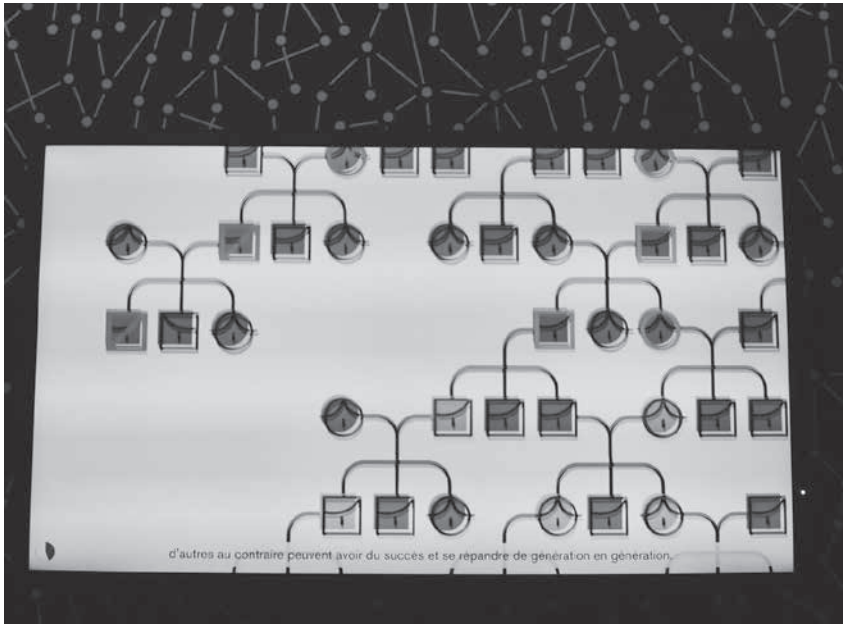


写真3 自然科学の成果を用いた映像コーナー  
上：遺伝学に基づいた啓発的なアニメ映像  
下：人間の特徴と遺伝の関係を学べるインタラクティブ映像  
(2017年12月27日，人類博物館にて筆者撮影)

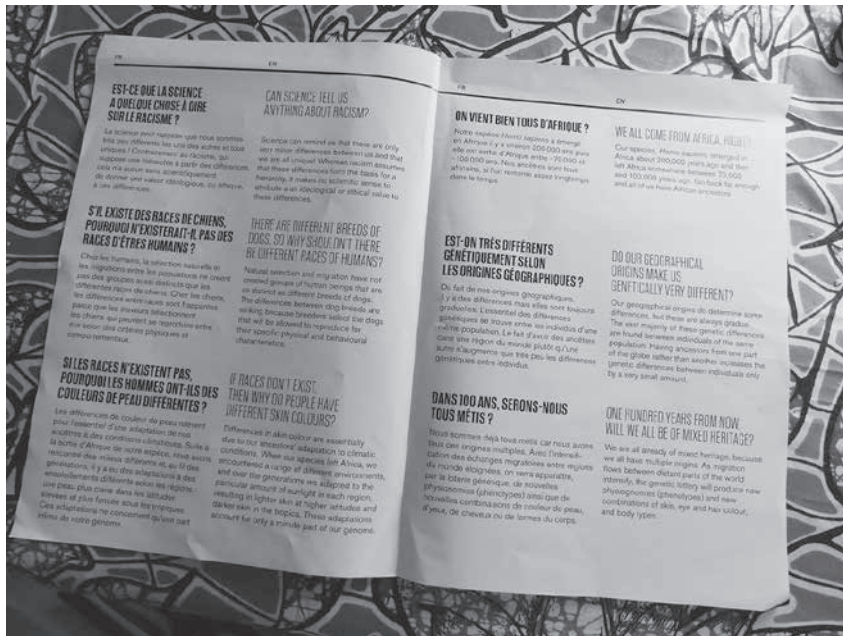
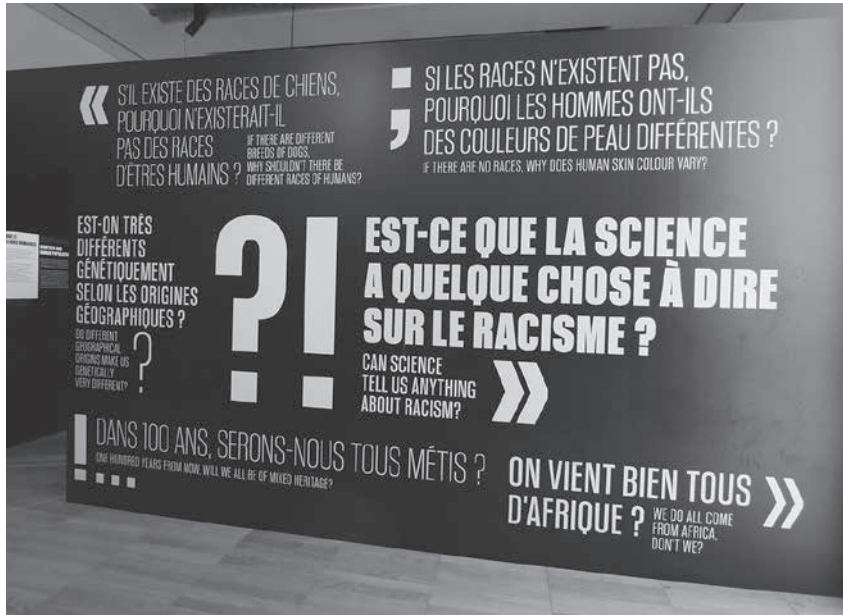


写真4 人種をめぐる素朴な疑問とそれへの回答上：壁面に掲示された疑問の数かず下：館内で無料配布している一問一答のパンフレット (2017年12月27日, 人類博物館にて筆者撮影)

像コーナーでは、多様なルーツをもつ 11 人、たとえば、アフリカ系、アラブ系、アジア系などの人びとが、生い立ちや現状の困難さなどを数分～10 分程度の映像で語る（音声はフランス語、すべてに英語字幕が付く）。また、同コーナーの壁面には、フランスの現状として、さまざまな社会調査に基づいた統計資料がグラフで表示されており、全体として、今日も多くの差別や偏見をめぐる課題が残されているという状況を示している。

## 2.2 展示会のおもな特徴

おおまかな展示の構成を紹介したが、その中でもとくに特徴的であった箇所を抽出して検討する。

まず、「(1) 分類をめぐる政治性」から導入する点は、ユニークであった。「人種」というカテゴリーは自然界の所与のものとしてもたらされるのではなく、分類を行っているのは他ならぬ私たちであるという認識を共有するところから始まる。本質主義的な自然観、人間観を揺るがす上で、効果的な導入であると見られる。

次に、「(2) 人種主義の構築過程」においては、フランスの博物学、人類学の豊かな蓄積に基づき、多くの資料をふんだんに展示するとともに、それらを礼賛するのではなく、負の歴史の系譜としても紹介していることは、これらの学の今日的な姿勢として注目に値する。

さらに、「(5) 自然科学の成果」について、自然科学はかつて人種概念を補強する側の役割を担っていたこともあったが、現在ではむしろそれらを解体する役割とともに啓発に取り組んでいる点が興味深い。

そして、「(6) 素朴な疑問と回答」に関しては、やはり人間の肌の色は違うから人種は存在するのではないかといった素朴な思い込みに対して、科学的に簡潔に回答を与えることによって、高い教育効果を上げていると見られる。

総じて、自然科学、歴史学、社会学などの成果をふんだんに取り入れて、人種主義の過去と現在の課題が明瞭に浮き彫りになる展示となっていた。

### 3 【事例2】 アメリカ人類学会による展示会

#### 3.1 展示会の概要紹介

次に、アメリカでの展示の紹介に移る。「人種—私たちはそんなに違うのだろうか?」は、アメリカ人類学会 (American Anthropological Association (AAA)) とミネソタ科学博物館 (Science Museum of Minnesota) が共同制作した展示である (American Anthropological Association n.d., 2016; Science Museum of Minnesota n.d.)。2007年にミネソタ科学博物館で最初に開催されてから、これまでに全米のべ40以上の都市で巡回展示されてきたものである<sup>2)</sup>。2017年現在は、シカゴ歴史博物館を会場として開催されている (Chicago History Museum 2017) (写真5)。

シカゴ歴史博物館での展示は、三つの大きなホールにより構成されている。それぞれ、総論的なエントランス、歴史的経緯とアメリカ社会の現状、新しい成果と未来への提言といったテーマをそれぞれもっているように見受けられた。これらについて、おもな内容をかいつまんで紹介する。以下では、ホールごとに(1)~(3)と分類して展示内容を紹介するが、小見出しに挙げた語句は筆者の文責によるものである。

##### (1) 総論的なエントランス

最初のホールでは、まず掲示と映像による概説が行われる。「人種は、最近の人間による発明である」という文言から展示が始まっている (写真6上)。

映像のなかでは、人種が生物学的概念ではなく歴史的に構築されたものであること、北米の植民地化や奴隷貿易という政治的な文脈において発明され、強化されたというプロセスが示される。植民地化の過程のなかで、先住民の人口が激減、白人が年季奉公で労働に従事していたが、やがてアフリカ黒人奴隷の導入によって次第に置き換えられていったという経済構造の変化を紹介している。また、独立宣言の起草者であるトーマス・ジェファソンも奴隷所有者であったという逸話、第二次世界大戦中に日系アメリカ人たちが収容された過ちなども紹介される。あわせて、アメリカ人類学会がこの問題に組織として取り組んできたことが紹介される。



写真5 アメリカ、シカゴ歴史博物館および展示会エントランス  
(2017年11月19日、シカゴ歴史博物館にて筆者撮影)

ホールの床には、大きな世界地図が示されており、ホモ・サピエンスはすべてアフリカに由来していること、短期間のうちに世界に拡散したこと、人の歴史とは移動と混血の歴史であることなどが解説されている（写真6下）。

## (2) 歴史的経緯とアメリカ社会の現状

次のホールは、出アフリカ以降の人間の移住の歴史、ならびに北米への入植の歴史、奴隷制に起因する人種主義の強化と、その残滓としての現状のアメリカ社会に関連する展示である。ホールの中央に大きな年表が配置され、それぞれの時代における人種関連のトピックが示される。

あわせて、多くの映像モニターが配置され、そのいくつかはインタラクティブ映像となっており、参観者が操作して学ぶことができる。たとえば、世界地図に表示される人間の移動の歴史を見ることによって、出アフリカと世界的な拡散のプロセスを手で動かしながら学ぶことができる（写真7）。

さらに、このホールでは、アメリカ社会の歴史と現状の諸問題を提示している。たとえば、アメリカ先住民が住んでいた北米大陸の土地をヨーロッパ系入植者が収奪してきた歴史を、複数の地図の比較で示す展示、求職者の名前とそれから連想される出自による就職差別に関する展示などもあった。また、札束がうず高く積み上げられているコーナーがあり、高い札束の山は白人の所得を、低い山は黒人のそれを示すというふうに、現実としての社会階層の分離の状況を視覚的に表現している（写真8）。

## (3) 新しい成果と未来への提言

三つ目のホールでは、新しい自然科学的な成果の展示が多く含まれていた。たとえば、肌の色に関する基本的な解説がある。人間の皮膚は、メラニン色素の量の違いにより色が異なって見えるが、その色素の量は、日照に伴う体内でのビタミンD合成のプロセスと関連している。皮膚のメラニンの量の地理的な分布は、緯度と日照によって説明できるということを世界地図とともに説明し、本質主義的な人種概念と結びつける合理的な理由がないことが明らかに示される。

また、「高血圧—人種？それとも人種主義？」という展示では、アフリカ系アメリカ人に高血圧が多い傾向について分析している。ヨーロッパ系アメリカ人と

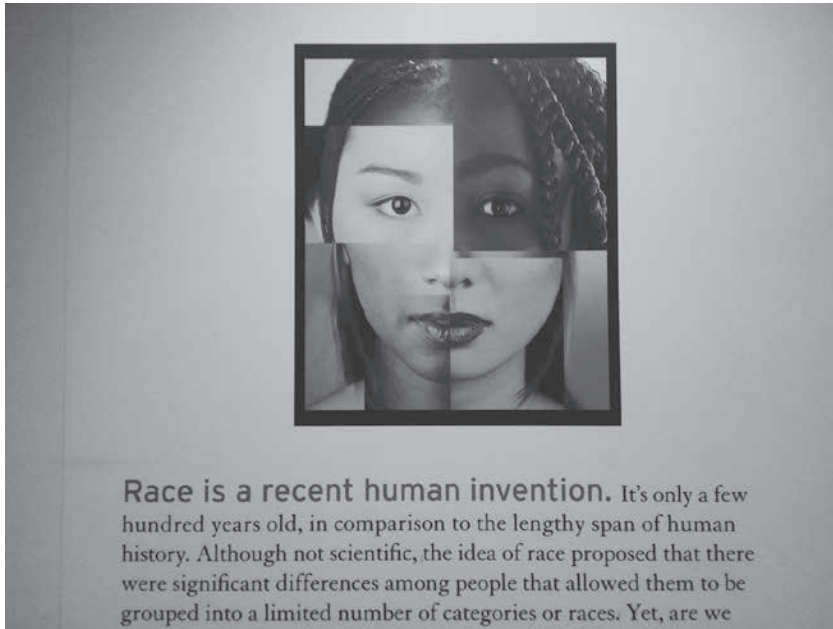


写真6 総論的なエントランスにおける展示  
上：「人種は、最近の人間による発明である」という文言から始まる。  
下：床に描かれた巨大な世界地図で、出アフリカと人間の移動を表現。  
(2017年11月19日、シカゴ歴史博物館にて筆者撮影)



写真7 ホモ・サピエンスの出アフリカを学べるインタラクティブ映像  
(2017年11月19日, シカゴ歴史博物館にて筆者撮影)

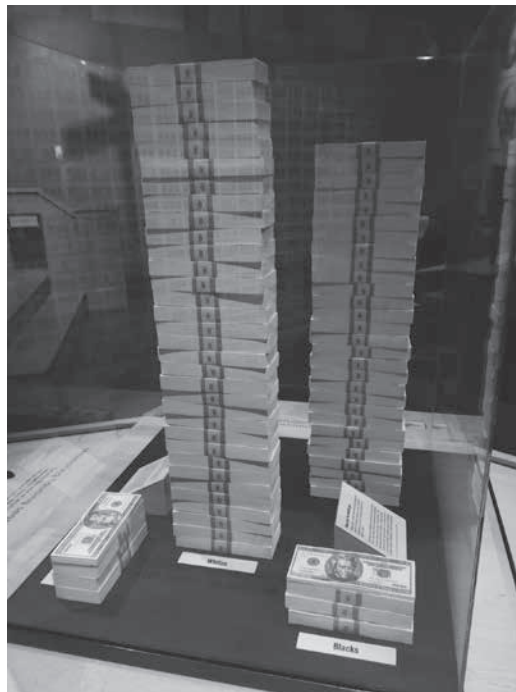


写真8 人種間の所得格差を、札束の高さで表現する。  
中央左の最も高い山が白人、手前の最も低い山が黒人。  
(2017年11月19日, シカゴ歴史博物館にて筆者撮影)

比較すると、確かに血圧が高めの人が多いとされるが、一方で、遺伝的に近縁であるはずのアフリカのナイジェリア人やカメルーン人においては血圧が低いという結果が出ている。つまり、アフリカ系アメリカ人の血圧の高さは、人種によるのではなく、アメリカ社会で人種主義のストレスにさらされていることが原因ではないかという医学的な見解が紹介されている。

さらには、黒人に特有の人種に関連する疾病と一般に考えられている鎌状赤血球症は、遺伝学的に精査すれば、その地理的分布はアフリカとは一致しないという展示もあった。

最後のコーナーは、国勢調査をめぐる展示である。アメリカの国勢調査では、人種をめぐる質問がある。その選択肢の項目が歴史的に変化してきたことを、映像で分かりやすく紹介する。たとえば、ある同じ人物について、1800年の調査であれば奴隷 (Slave)、1920年であればムラト (Mulatto)、1960年であれば黒人 (Negro) として分類されたし、別のある人物については、1930年であればメキシコ人 (Mexican)、1950年であれば白人 (White)、1990年であればヒスパニック系白人 (Hispanic White) として分類された、という具合である (写真9上)。このように、人間の分類のカテゴリーは歴史的に構築され、しばしば国家によって操作され、かつ変更されることもあるという事実が明瞭に示される。

これらを踏まえた上で、参観者に投票を呼びかける。今後のアメリカの国勢調査では、どのような項目で質問するべきだろうか。「現状のまま」「項目をシンプルにする」「自己申告にする」「項目を廃止する」の四択で、自分ならどれを望むかをタッチパネルで投票する (写真9下)。このことによって、参観者自身がこれらのカテゴリー化に対してどのように向き合い、いかなる社会を構築していかうとするかの意志表示を求めるという仕掛けである。ちなみに、筆者が見学した時点での投票結果としては、「項目を廃止する」が最多得票、次いで「自己申告にする」であり、「現状のまま」が最少得票であった。

### 3.2 展示会のおもな特徴

どれも興味深いものであったが、いくつかの特徴的な展示についてコメントを付す。

「(1) 総論的なエントランス」および「(2) 歴史的経緯とアメリカ社会の現状」

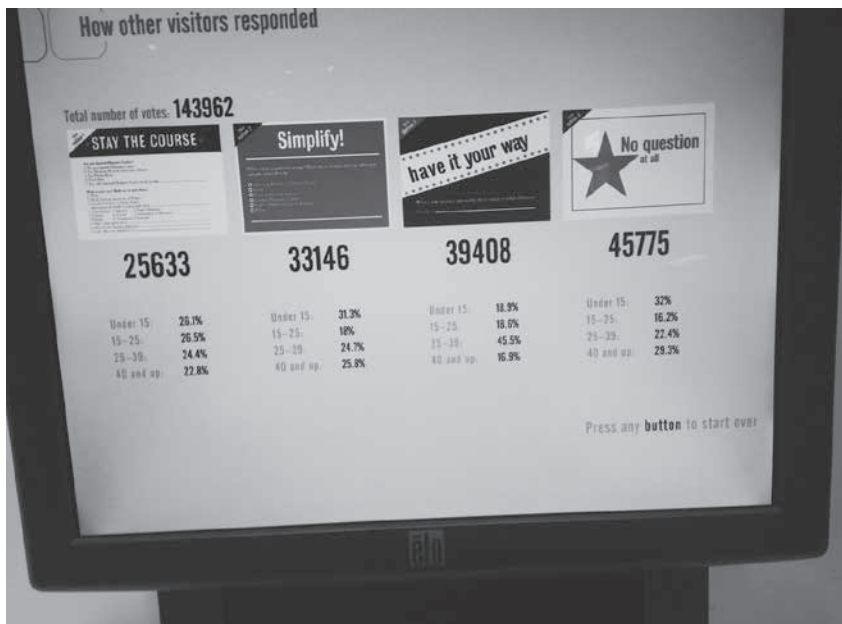
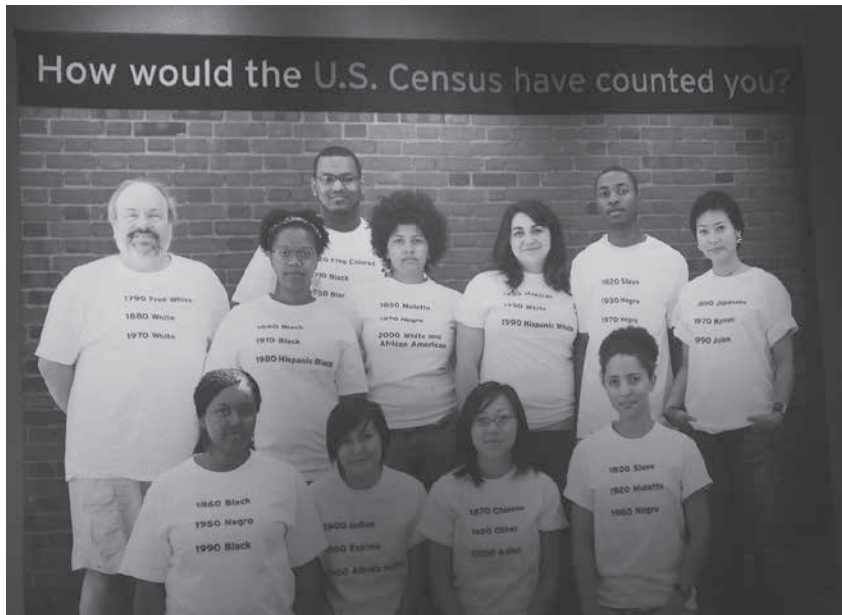


写真9 アメリカの国勢調査と人種をめぐるコーナー  
 上：同一人物が、時代によって異なる分類をされることを映像で表現。  
 下：将来の国勢調査の質問項目について、参観者がタッチパネルで投票する。  
 (2017年11月19日、シカゴ歴史博物館にて筆者撮影)

において、北米の開拓や奴隷制、土地収奪という政治経済的な背景との関連を、比較的公正に紹介していることが特徴的であった。日系アメリカ人の収容、人種間の所得格差など、アメリカが抱える歴史と現状の負の側面を明快に示していることも、強いメッセージ性をうかがわせた。

また、「(3) 新しい成果と未来への提言」に多くの展示面積が割かれていたのが特徴である。自然科学、とくに医学の成果を分かりやすく紹介している点が注目に値する。さらに、国勢調査の今後のあり方をめぐって、投票によって参観者に意志表示を求めるという仕掛けは、人種の問題を他人事として受け止めるのではなく、ひとりひとりが自ら構築している分類・認識であるという自覚を促すという意味において、興味深かった。今後の社会のあり方を各自に考えさせるという意味で、優れた主権者教育の機能をもあわせもつと言えよう。

## 4 フランスとアメリカの展示会を比較して

### 4.1 両展示会の共通点

ふたつの国のふたつの都市で開かれていた、人種と人種主義をめぐる展示会を比較することによって、今日のこの分野の取り組みの特徴をうかがってみたい。

まず、共通点である。重要なポイントとして、どちらも人種を歴史的に構築されたものであるとする認識で一致している。人種については、その客観的実在を前提としつつ優劣の序列化は行わないという保守的な見解もかつては支持されていたが(高橋 2005)、どちらの展示も、そのような認識に立つのではなく、人種概念それ自体を虚構とする立場を取っていた。しかも、それを映像や文字で強調するというふうに、展示会の主たるメッセージとして掲げていた。

次に、どちらも自然科学の成果を多く取り入れて、人種概念の解体と優劣の序列化の無意味さを説くという手法を用いていた。人類進化研究の知見として、ホモ・サピエンスがアフリカ単一起源であることを強調する。また、遺伝学や生理学の知識を援用しながら、人間個々人の遺伝的多様性、集団間の生物学的な差異を強調することの無意味さ、肌の色にとられることの無根拠さを指摘している。形質人類学などの自然科学は、従来は人種概念を補強する側の役割を担って

いたこともあった。しかし、今日の新しい知見は、むしろ、人種主義が非科学的な固定観念に過ぎなかったことを明らかにしている。それを分かりやすく展示で活用している点に、ふたつの展示会の共通の特徴を見出すことができる。

さらに、これらの展示が歴史研究と社会学的調査の厚い蓄積に根差していることである。人種主義成立の背景として政治経済的な要因を分析して示し、また、歴史的に構築された人種が今日もなお社会の亀裂と格差を生む要因として強固に残存している状況を、データとともに、分かりやすく表現していた。歴史と現状に関する緻密な研究の成果が、どちらの展示会でも存分に活かされていた。

展示の手法としては、どちらも年表や地図、図表をふんだんに用いて視覚的に分かりやすい工夫をする他、アニメーション、ドキュメンタリー映像、インタラクティブ映像によるワークの取り入れなど、体験的な展示の工夫を行っていた。

#### 4.2 両展示会の相違点

両者の違いについても触れておきたい。まず、それぞれの社会の事情を背景として、歴史記述の重点がややずれていたことがある。フランスでは、アフリカなどにおける植民地支配と博物学・人類学の蓄積に立脚している一方、アメリカでは北米入植と奴隷貿易の記述が多く見られた。今日的な分析においても、フランスでは、ユダヤ人、アフリカ系、アラブ系といった、ヨーロッパのマイノリティ、植民地、移民に関わるカテゴリーの話題が多いのに対し、アメリカでは奴隷制に由来するアフリカ系と、ヒスパニック系の人びとについての事例が多めであった。

また、分野の比重としても、フランスは歴史を中心とした人文社会科学的な成果が多かったのに対し、アメリカでは医学的・生物学的な研究成果を多めに紹介する傾向にあった。

フランスのみに見られた要素としては、「そもそも分類とはどういう行為であるか」をめぐる根源的な問いかけから展示が始まっている点に特色があった。分類の政治性をめぐる思索的、抽象的な問いかけをすところには、フランスにおける人文科学の伝統が垣間見えているのであろうか。

一方、アメリカのみに見られた要素として、国勢調査における人種関連の質問項目をめぐる模擬投票があった。主権者としてひとりひとりが人種問題にどのよ

うに向き合うかということを考えさせる、きわめて実践的な教育装置であり、アメリカにおけるプラグマティックな発想の現れと言えるかもしれない。

展示の方法としては、フランスはドキュメンタリー映像を多用する傾向があり、アメリカでは医学的なデータなどを盛り込んだ図表の掲示が多めであった。展示での使用言語として、フランスではフランス語と英語の二言語併記を徹底していたが、アメリカでは英語のみであり、他の言語への配慮はなかった<sup>3)</sup>。

## 5 おわりに——同時代における意義と課題、今後への示唆

### 5.1 同時代におけるふたつの展示会の意義

ヨーロッパとアメリカの人類学は、それぞれやや異なった歴史的背景をもちつつも、しばしば呼応し合い、イデオロギーと手法を相互に引用し合いながら発展を遂げた（瀬口 2008）。そして、両地域の人種主義も、それぞれの社会状況を反映させながら、科学の装いをまとった強固なイデオロギーとして成立した。今日、ヨーロッパでもアメリカでも、特定の属性の人びとを異質な者たちと表象して理解を閉ざし、あるいは人権を否定し、政治的暴力と結びつけようとする潮流が目につくようになりつつある。こうした状況にあって、どちらの展示も、同時代に向けた強いメッセージ性を感じさせる、大胆かつ有意義な試みであったと言えるであろう。

両方の展示会のタイトルには、共通して「私たち（英 *we* / 仏 *nous*）」ということばが含まれている。「私たち」とはだれのことであり、そこから外される「他者」とはだれなのか。そもそも、外される他者があってよいのか。それを決めうるのはだれなのか。私たち市民は何を引き受け、何を発していくことが望ましいのか。政府の政策や教育のあり方に思考の責任を委ねてしまうのではなく、ひとりひとりが引き受けて考えるべき根源的な問いとして、人種と人種主義の諸課題を提示している。両国において蓄積されてきた豊富な資料と新しい成果に基づいて開催された、これらふたつの展示会の同時代的意義を評価したい<sup>4)</sup>。

## 5.2 残された諸課題

一方、課題についても触れておきたい。まず、人種概念の構築を、欧米における奴隷制と植民地支配に関連づけて論じるのは、史実の一面を適切に反映していると思われ、また、歴史に真摯に向き合っていることの証左でもあると言えるが、それが人種にまつわるすべての現象を構築した要因であると言い切つてよいかどうかについては、議論の余地がある（竹沢編 2005）。非欧米圏の人種概念をめぐる実証的な検討と比較を通じて、「欧米による自己批判」の域を越えた、人間の全体課題としての人種問題の理解へと向かうことが望ましい。

それにも関連するが、両展示会では、おもにヨーロッパ系の人びとによる支配と差別に焦点が当てられており、それ以外としては、ルワンダの事例、アイヌやピグミー系の人びとが置かれた境遇に関するものが少し含まれていた程度であった。企画・開催したフランスとアメリカの特有の歴史的社会的状況に重点を置くことは理解しつつも、人間社会に遍在する課題としての人種主義に取り組むための事例と視座を含むことが期待される。

三つ目に、排外主義と序列化の今日的な展開への対応に、ややもの足りなさを感じたことがある。近年では、肌の色や血縁集団に固執する古いタイプの人種主義はやや後退し、むしろ、宗教や国籍、文化や言語を口実にした差別と偏見が横行する状況がある。さらに細分化かつ精緻化した人間分類として、生殖テクノロジーと資本主義と結びつきつつ、個々人を遺伝的に価値序列化する新しい理解の枠組みが出現し、人びとを分断する装置として力をもち始めている。旧来の人種主義を批判するあまり、かえって新しい人間分類がもたらす政治性への批判的検討がおろそかになってしまうのではないかという危惧を残した。

むろん、期間と面積と素材の限られた特別展示会で、すべてを期待するのは困難である。こうした点を含めて、人類学が研究を進めるとともに、社会に関与して提言すべき課題は多いということを、この展示会批評の末尾に付言しておきたい。

## 5.3 日本における今後への示唆

私たち日本にいる者が、これらの試みから学びうることは何であろうか。今後

のための示唆を、三点に分けて述べたい。

まず、人種と人種主義をめぐる議論と研究成果の整理に取り組むことである。このテーマにまつわる社会での議論は、ともすると、極端な思想に基づいた差別発言・行為と、それらに対する感情的な反発という応酬が繰り返されがちである。研究者は、その専門家としての役割において、人種や人種主義に関わるさまざまな概念、今日までの成立過程、そして、現状に関する研究成果の蓄積と到達点を冷静に整理、分析、発信し、市民と共有していくことが求められる。

次に、博物館や大学などの機関が、類似の企画を行い、教育・啓発に取り組むことが望ましい。本報告の冒頭で示した通り、人種と人種主義を正面から取り上げた博物館展示企画は、これまで少なかったと言える。人種問題というと、何か海外の遠い話題、あるいは、政治的であるためにあまり触れたくないテーマという印象をもつ市民も多いかもしれない。しかし、そのように向き合うことを避けていては、この問題に対する誤った認識は修正されないであろうし、その蔓延を防ぐこともできない。人類学の分野の専門家が取り組む、学術的かつ大規模で、明快なメッセージ性のある展示企画が、日本でも試みられてよいと筆者は考えている。問題提起の意図をもって、人種および人種主義をめぐる展示会を企画していくことを提案したい。

さらに、今回の両展示会から学べたように、自然科学の成果を十全に活用していくことを提唱したい。医学的、生物学的な研究は、確かに人間の分断を強化、固定するイデオロギーとなって、数多くの不幸をもたらす原因のひとつを成した過去がある。しかし、今日、むしろ科学の成果は、かつての偏見に満ちた人種観を解体する利器として活用することができる段階に到達している。人文社会科学に従事する研究者や博物館関係者が、自然科学者と共同して近年の成果を取り入れた新しい人間観を構築し、人種主義を乗り越えるための研究、教育、啓発に取り組んでいくことが強く望まれる。

自然／文化の分野の境界を越え、人類学、博物館とその隣接領域の専門家がその知見を結集して、人びとを政治的に分断する作為に抗いつつ、むしろ人びとの結びつきと対話の場を提唱できるような展示企画が近い将来に実現することを望みつつ、本報告の結びとしたい。

## 謝 辞

本報告のもととなる現地調査は、愛知県立大学長期学外研究制度の期間を利用して行われた。JSPS 科研費 JP16H01968 「応答の人類学」（代表：清水展）ならびに日本文化人類学会課題研究懇談会「応答の人類学」（代表：亀井伸孝）における共同研究、日本学術会議シンポジウム「高等学校・新科目『公共』にむけて—文化人類学からの提案」（2016年12月18日、東京、主催：日本学術会議地域研究委員会人類学分科会（委員長：窪田幸子）、共催：日本文化人類学会、JSPS 科研費 JP16H06320 「人種化のプロセスとメカニズムに関する複合的研究」（代表：竹沢泰子）における議論を背景として執筆された。フランス、人類博物館の Alain Froment 博士には、展示会視察のための便宜を図っていただいた。国立民族学博物館の査読ご担当の方には、有益な助言をいただいた。記してお礼申し上げたい。

## 注

- 1) 本報告では、英語の *race*、フランス語の *race* のいずれも「人種」と訳し、英語の *racism*、フランス語の *racisme* のいずれも「人種主義」と訳している。原語の *race*, *racism*, *racisme* には、いずれも複数の含意があり、日本語においてもさまざまな訳語が当てられている。今回紹介するふたつの展示会では、いずれにおいても、生物学的に何らかの根拠があるとの想定のもと、歴史的に人びとの分類に用いられてきた枠組みとして *race* が用いられ、それを客観的事実として受け入れる立場を *racism* / *racisme* と呼んでいる。いずれも、日本語における「人種」「人種主義」の概念に一致すると考えて、それらの訳語を用いることとした。「レイス／ラス」「レイシズム／ラシズム」と表現することも可能であるが、読みやすさを優先して漢字表記の術語を選んだ。
- 2) 瀬口（2008）は、アメリカ自然人類学会（American Association of Physical Anthropologists）の歴史を紹介するなかで、アメリカ人類学会による「Race」展の取り組みについて紹介している。かつてアメリカ自然人類学会が「生物学的な人種」を捏造してきた歴史をもつがゆえに、今日その概念の無効性を訴えていると分析している。また、「人類学者たちの啓蒙活動の成果が一般大衆にはまだまだ浸透していないのが現実である」とも指摘している。
- 3) 展示会の使用言語に関わる事例として、フランスの人類博物館の同展示会においては、期間中に少なくとも2回、ろう者のスタッフがフランス手話で展示解説を行うろう者参観者対象のツアーを設けていた。シカゴでの展示会で同様の取り組みがあるかについては、不明である。
- 4) 本報告では、両展示会の参観者数や反響、効果などに関する資料を得ていないため、それらを含めた全体の成果に関する評価については、別稿の課題としたい。

## 参考文献

### 〈日本語〉

川島浩平・竹沢泰子編

2016 『人種神話を解体する3—「血」の政治学を越えて』東京：東京大学出版会。

京都大学人文科学研究所

2017a 『「人種神話を解体する—「血」の政治学を越えて」出版記念連続セミナー』<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/wp-content/uploads/2017/05/20170524134300134312.pdf>（2018

- 年 3 月 11 日閲覧)
- 2017b 『人種神話を解体する——科学と社会の知』出版記念連続セミナー』<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/wp-content/uploads/2017/09/201709141117.pdf> (2018 年 3 月 11 日閲覧)
- 国立民族学博物館
- 2004 『特別展「多みんぞくニホン——在日外国人のくらし」』<http://www.minpaku.ac.jp/museum/exhibition/special/200404/index> (2017 年 12 月 28 日閲覧)
- 斉藤綾子・竹沢泰子編
- 2016 『人種神話を解体する 1——可視性と不可視性のはざままで』東京：東京大学出版会。
- 坂野徹・竹沢泰子編
- 2016 『人種神話を解体する 2——科学と社会の知』東京：東京大学出版会。
- 瀬口典子
- 2008 「アメリカ自然人類学会の歴史と動向」*Anthropological Science (Japanese Series)* 116: 57-66。
- センゴネット
- 2017 「なぜ差別されなければいけないのか!? ——川崎でレイシズムを考える」<http://sengonet.jp/archives/166> (2018 年 3 月 11 日閲覧)
- 高橋健司
- 2005 「世界史教育における『人種』概念の再考——構築主義の視点から」『社会科教育研究』(日本社会科教育学会) 2005(94): 14-25。
- 竹沢泰子編
- 2005 『人種概念の普遍性を問う』京都：人文書院。
- ヘンリ, スチュアート
- 2002 『民族幻想論——あいまいな民族 つくられた人種』大阪：解放出版社。
- リバティおおさか
- 2014 『企画展「SAY NO TO RACISM ——人種差別にレッドカード」』<http://www.liberty.or.jp/exhibition/SAYNOTURACISM.html> (2017 年 12 月 28 日閲覧)

## 〈英語 / 仏語〉

- American Anthropological Association
- n.d. Race: Are We So Different? <http://www.americananthro.org/LearnAndTeach/Content.aspx?ItemNumber=2062> (accessed on December 28, 2017).
- 2016 Race: Are We So Different? <http://www.understandingrace.org/home.html> (accessed on December 28, 2017)
- Chicago History Museum
- 2017 Race: Are We So Different? <https://www.chicagohistory.org/exhibition/race-are-we-so-different/> (accessed on December 28, 2017)
- Goodman, Alan H., Yolanda T. Moses, and Joseph L. Jones
- 2012 *Race: Are We So Different?* 1st ed. Chichester, West Sussex, UK; Malden, MA: Wiley-Blackwell; Arlington, VA: American Anthropological Association.
- Heyer, Evelyne et Carole Reynaud-Paligot (eds.)
- 2017 *Nous et les autres: des préjugés au racisme*. Paris: La Découverte.
- Musée de l'Homme
- 2017 Nous et les autres: des préjugés au racisme. <http://www.museedelhomme.fr/fr/visitez/agenda/exposition/nous-autres-prejuges-racisme> (accédé le 28 décembre 2017)
- Science Museum of Minnesota
- n.d. Race: Are We So Different? <https://www.smm.org/exhibitrental/race-are-we-so-different> (accessed on December 28, 2017)
- UNESCO
- 2017 Exposition «Nous et les autres: des préjugés au racisme» <https://fr.unesco.org/events/exposition-nous-autres-prejuges-au-racisme> (accédé le 28 décembre 2017)